

メソアメリカにおけるオルメカ文化の広がりとその定義

伊 藤 伸 幸

はじめに

メソアメリカとはメキシコ北部からホンジュラス、エル・サルバドルに至る地域をさす。そこに栄えた文明をメソアメリカ文明と呼ぶ(図1)。オルメカ文化はメソアメリカ文明の一文化である。

オルメカとはゴムを産出する土地に住む人々という意味である。地理的にはメキシコのベラクルス州メキシコ湾岸地帯に相当する。当初、オルメカ文化はゴムを産出するこの地方で遺物が多く出土したため漠然とオルメカ文化と呼ばれていた。また、オルメカ文化はメソアメリカ地域の母文化として知られている。

一方、南米大陸アンデス地域で同じ頃に栄えたチャビン文化はジャガー中心の信仰を持っておりオルメカ文化との関係も考えられる。しかしジャガーの表現方法はオルメカ文化とチャビン文化とでは異なる部分もある。また、メソアメリカ地域と南米大陸アンデス地域とは遠く離れており、直接の影響があったのか中継する地域があったのかはさらに調査する必要がある。ジャガー信仰から見た場合には両文化の共通要素は確かにあるが、他の遺構・遺物を見た場合には非共通要素もみだせる。現時点ではオルメカ文化とチャビン文化を比較研究するには資料が少ないため、今後の考古学調査の増加が期待される。

さて、オルメカ文化誕生以前の状況を簡単に説明する。新大陸で人類が初めて土器作りを始めた地域は、エクアドル、コロンビアの太平洋岸と言われている。メソアメリカ地域では、メキシコ南部チアパス州からグアテマラの太平洋岸地域で土器をつくる文化が始まったと考えられている(Coe 1961)。この時期にはまだ大きな神殿もしくはピラミッド基壇は建造されていない。ただ、チアパス州太平洋岸にある遺跡パソ・デ・ラ・アマダに見られるような大きな住居址もしくは集会所、小神殿が存在していた可能性は高い(Blake and Feddema 1991)。この時期の遺跡から石彫等の大きな人工物などが出土したとは報告されていない。また、この時期にメソアメリカ文明の基礎がつくられ始める。そして、この最初の土器文化の後にオルメカ文化が勃興する。

以下、まずオルメカ文化研究の歴史と問題点を検討し、カミナルフユ遺跡発掘調査からメソアメリカの時期区分を考察する。そして、以上のことを考慮しつつオルメカ文化の広がりと定

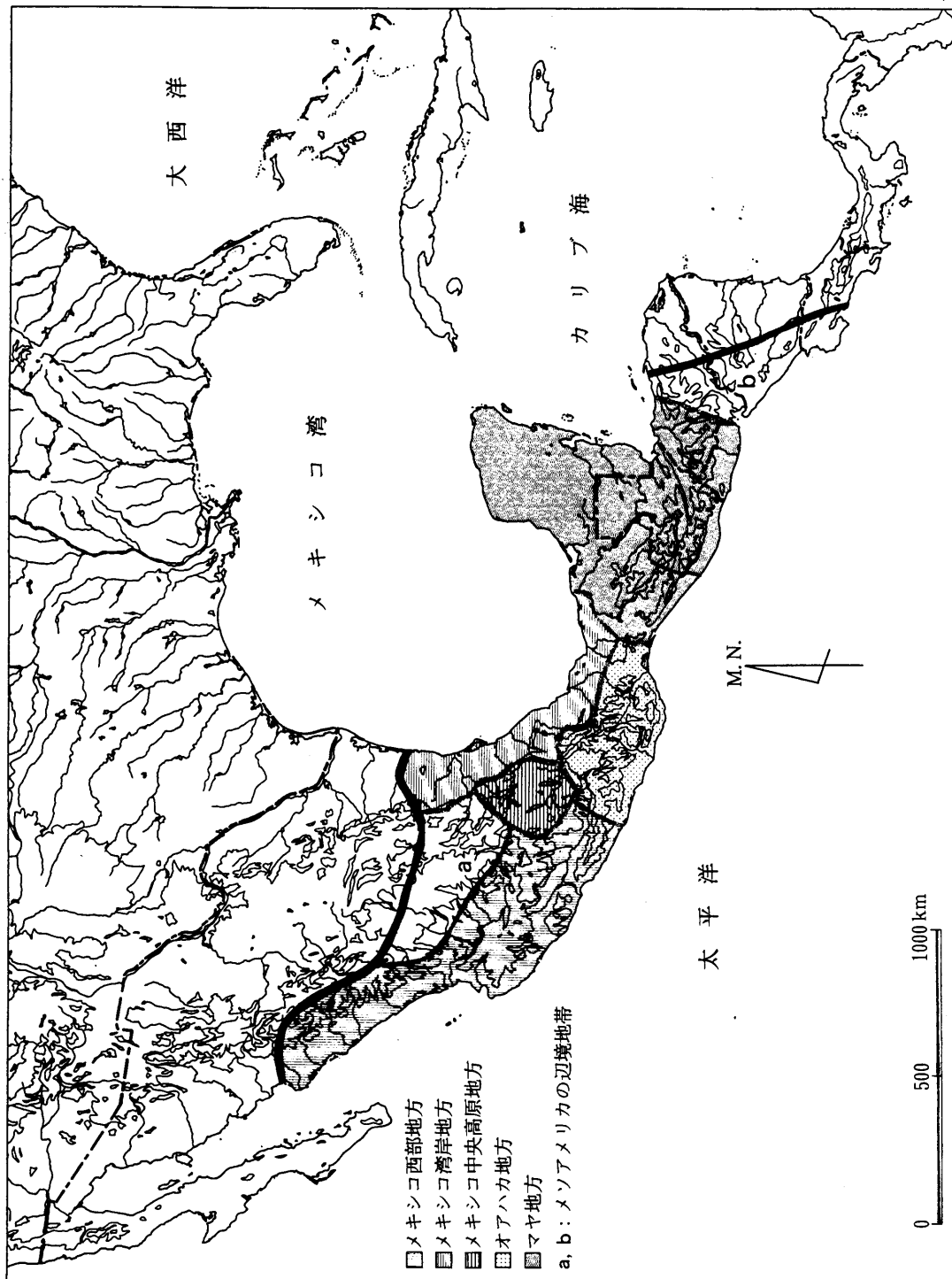


図1 メソアメリカ全図

義を考えていく。

これまでのオルメカ文化研究と問題点

ヴェイラントはオルメカ文化の特徴、地理的分布、歴史を論じ、はじめてこの文化をオルメカと名付けた。オルメカ文化の遺物にみる特徴としてジャガーのような顔、赤ん坊のような顔、咆哮するジャガーの口、ひしゃげた鼻等を挙げている。その分布範囲は、メキシコのトラスカラ州とベラクルス州北部からプエブラ州南部、オアハカ州東部を通りチアパス州に至る地域としている (Vaillant 1932)。

1942年、メソアメリカ文化研究の諸問題を論じる円卓会議が「マヤとオルメカ」というテーマでメキシコのトゥクストラ・グティエレス市で開かれた。本論ではオルメカ文化に関して発表したカソとコバルピアスの主張を取り上げる。カソはヴェイラントが挙げたオルメカ文化の諸特徴はミチョアカン州からベラクルス州を北限とし南はホンジュラス、コスタ・リカにまで分布していることを発表した (Caso 1942)。コバルピアスはオルメカ文化が持つ諸要素を比較しオルメカ文化以外の諸文化はオルメカ文化の特徴を持っているがオルメカ文化は古期文化以外どの文化の要素も共有しないことを明らかにした。そして、マヤ文化を初めとする諸文化に先行してオルメカ文化があったと考えた (Covarrubias 1942)。ここで、はじめて型式学的にオルメカ文化とほかの文化を比較し編年を組もうとする姿勢が窺えるようになる (図2; Covarrubias 1957)。

また、スターリングはラ・ベント遺跡の発掘調査などからオルメカ文化の石彫分布とその特徴——1) オルメカ文化ではジャガーが最も重要な神である。2) 石碑の建立を始めたのはオルメカ文化の人々であり、その後メキシコ南部、グアテマラに広がった。3) オルメカ文化は、メキシコ中央高原からエル・サルバドルまでが範囲で、1000B.C.~500B.C.に栄えた。——を明らかにした (Stirling 1943, 1955, 1965)。

ドラッカーたちはラ・ベント遺跡の発掘調査をおしすすめオルメカ文化の知見を広げていった。この遺跡で出土した炭化物を C¹⁴ 年代測定にかけ、ラ・ベント遺跡が先古典期中期に属することを示した (Drucker 1952; Drucker, Heizer and Squier 1959)。

一方、コウはスターリング同様オルメカ様式の分布からタバスコ州、ベラクルス州にまたがる地域にオルメカ文化の全神話的図象があることを示し、ここがオルメカ文化の中心地域であると考えた。また、オルメカ文化の中心地域以外はその植民地と考えた。そして、オルメカ文化の植民地の石彫には軍事的な主題が多いこととアステカ文化の時代(15世紀後半から1521年)に果たすポチテカ(商人であると同時に戦士でもある)の役割から類推して、オルメカ文化の支配形態は経済活動と軍事活動が重要な役割を担っていたとしている (Coe 1965 a, b, c)。

クレウロウらはオルメカ文化の巨石人頭像を分類し、型式編年を組んだ (Clewlow, Cowan,

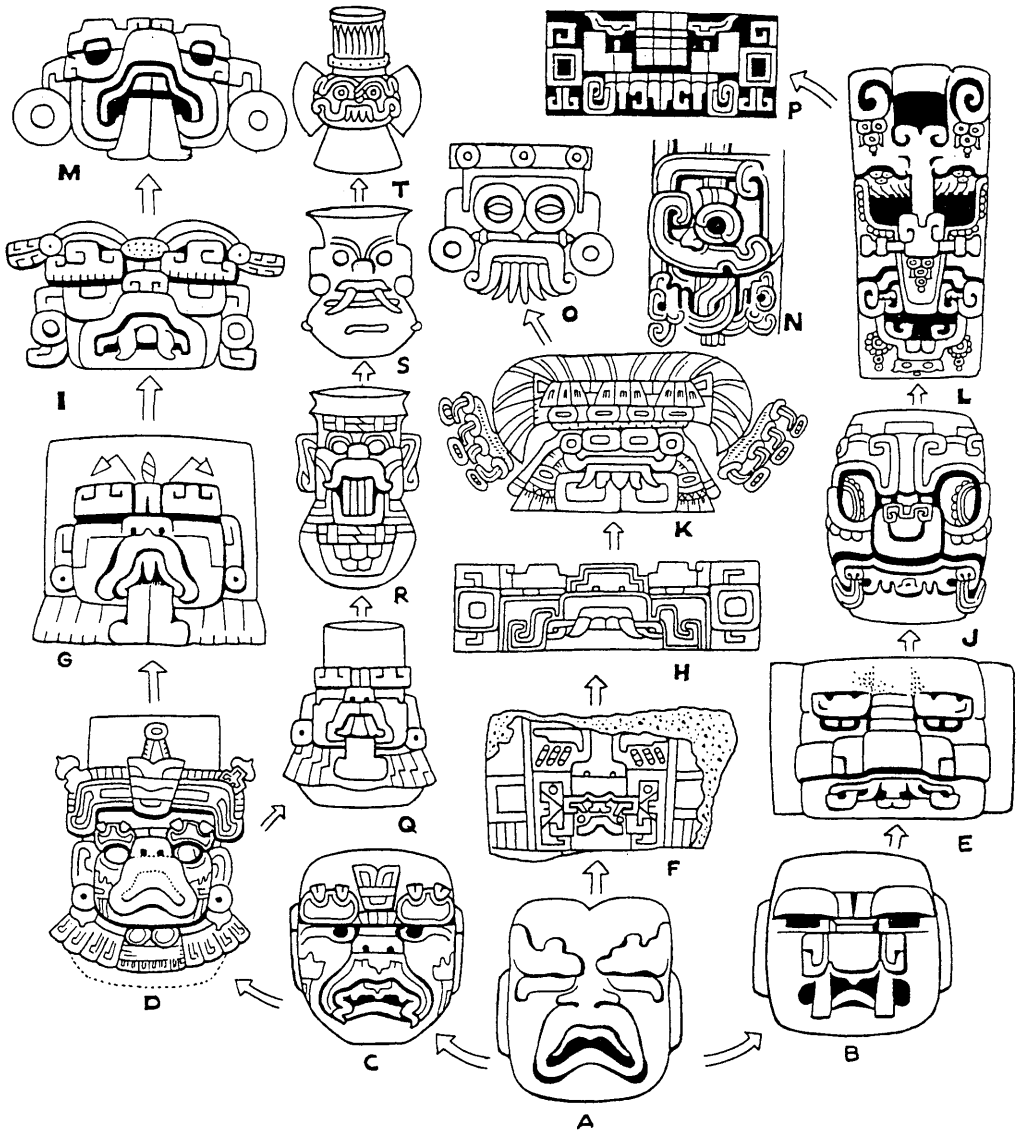


図2 コバルビアスの考えたジャガー文様の変遷図

Aはオルメカ文化のジャガーの顔，上に行くほど時代が新しくなる。

(Covarrubias 1957 fig.22 を転載)

O'Connell and Benemann 1967)。しかし、各遺跡間の相対編年が不確定なため、それぞれの型式が時期差を表わすのか地域差を表わすのかは検証できない。

1967年、オルメカ文化をテーマとする会議が開かれ、オルメカ文化に属するさまざまな遺跡発掘調査の成果が発表された。このなかで、ハイザーはラ・ベンタ遺跡の新しいC¹⁴年代測定結果をもとにオルメカ文化が始まる時期を1000B. C. 終末を迎えた時期を600B. C. と考えた。ま

た、発掘調査からラ・ベンタ遺跡では最も古い時期から完成されたオルメカ文化が出現していると述べている (Heizer 1968)。コウもサン・ロレンソ遺跡の発掘調査にもとづいて形成期 (先古典期) 前期にオルメカ文化が既に完成された状態であったと発表した (Coe 1968)。ベルナルは、オルメカ文化を三地域——1) メキシコ湾岸にあるオルメカ文化の中心地をメトロポリタン・オルメカ, 2) オルメカ文化と共に独自の文化を発展させた地域をオルメコイデ, 3) オルメカ文化の影響で独自の文化が作り出せなかった地域をオルメカの植民地——に分類した (Bernal 1968 a, b, 1969)。一方、プロスコリアコフは古典期後期に再び建てた先古典期石彫の存在を指摘しており (Proskouriakoff 1968), 古典期後期の遺跡でもオルメカ文化の石彫が出土する可能性を示している。ファーストは民族事例からオルメカ文化の起源を南米と考えている (Furst 1968)。グローブ、フラナリは交易をとおしてのオルメカ文化の広がりを考えている (Flannery 1968; Grove 1968)。

その後、ジョラレモンはオルメカ文化の遺物に示される文様を集成し、10柱の神々の存在を示した。また、それらの神々は後古典期の神々に続く可能性を示している (Joralemon 1971, 1976)。クレウロウは、オルメカ文化の石彫を主に形で分類しラグナ・デ・ロス・セロス、サン・ロレンソ、ラ・ベンタの順に時期が新しく、大型で複雑な文様を持つ石彫は小形で単純な石彫より新しいとしている (Clewlow 1974)。しかし、編年を組む際に各遺跡、石彫の時期認定をおろそかにし、石彫が出土した遺跡ごとに石彫の型式を単純に決めている。ミルブレイスは、石彫を写実性、出土層位、土器の文様から I) 1250~1150B. C. II) 1150~900B. C. III) 700~400B. C. の3期に分類し、年代が新しくなるほど写実性が乏しくなり、III期には南起源と思われる要素がオルメカ文化の中心部分に入るとしている (Milbrath 1979)。この論文では写実性の有無を重視し型式編年している。

また、従来ジャガーのみに研究の比重がかけられていたオルメカ文化の精神世界研究も、中心となる主題がジャガーよりも鱷、蛇、蛙と考えられるとする論文もみられるようになる (Muse and Stocker 1974; Stocker, Meltzoff and Armsey 1980; Luckett 1976; Furst 1981)。

1981年、オルメカ文化研究に貢献した学者スターリングを記念する論集が出版され、当時の発掘調査の最新成果が報告されている (Benson 1981)。この論集には、オルメカ文化で特別な意味を持つ凹面鏡、老女と子供の神話的主题等の個別研究が見られる。また、病理学的な観点からオルメカ文化に見られる頭頂部のV字状凹みを考察した論文もあり、オルメカ文化研究は幅広くなっている。

一方、ピニャ・チャンは、エクアドルとコロンビアの太平洋岸から土器文化がメソアメリカにひろがりメキシコ中央高原とメキシコ湾岸の2極文化が発展し、メキシコ湾岸地方に最初の祭祀センターがつけられるとオルメカ文化は発展期を迎えたとし、衰退期には一部地方にオルメカ文化の影響が残ると考えた (Piña Chan 1982)。また、スーステイルはラ・ベンタ遺跡が他の遺跡より優位に立っているがトレス・サポテス遺跡、サン・ロレンソ遺跡と連合を形成して

いたとしている (Sousetelle 1985)。

オルメカ文化に属する遺跡の考古学調査についてはチャルカツインゴ遺跡 (Grove 1984, 1987), テオパンテクアニトラン遺跡 (Martínez 1986), ツツクリ遺跡 (McDonald 1983), チルパンシンゴ遺跡 (Reyna and Martínez 1989; Martínez 1990), カカワシキ遺跡 (Villela 1989) ほかで行われた。

ここで若干のまとめをする。ヴェイラントがオルメカ文化の特徴, 地理的分布, 歴史を論じて以来基本的にオルメカ文化を認定する基準は変わっていない。また, オルメカ文化の広がりについても大体メキシコ中央高原からエル・サルバドルまでという範囲は若干の変化はあっても基本的には変化していない。オルメカ文化研究のなかで, 石彫研究はスターリングがラ・ベント遺跡, サン・ロレンソ遺跡, トレス・サポテス遺跡から出土した石彫の研究を始めて以来オルメカ文化研究の柱になっている。最近では, ミルブレイス, クレウロウ他が厳密さに欠ける基準をもとにしたオルメカ文化石彫の編年をしているが, 層位学, 型式学, 図象学等を総合的に考察し石彫の研究しているものはない。また, 原位置出土遺物と遺構との関係を考慮にいられたオルメカ文化研究は見られない。オルメカ文化の全容を探るには, 石彫, 土器, 土偶といった遺物と建築遺構を詳細に検討し, オルメカ文化の全要素を総合的に研究することが必要である。

一方, ファーストはジャガー信仰をシベリア, 北米から南米にかけてみられるシャーマンと動物の関係について考察しオルメカ文化におけるジャガー信仰の概念は南米からメソアメリカに伝わったとしている。また, ジャガーのみに関心が寄せられていた精神世界研究も他の動物に関する研究が見られる。このため, オルメカ文化の精神世界を解明するには表現されている全動物を研究対象とし, そのなかでどの動物が中心となり他の動物はどんな役割をしていたかが理解されなければならない。そして, 歴史民族学の資料に基づく研究と考古学資料に基づく研究の接点をさがし, 新大陸におけるオルメカ文化のジャガー信仰の姿を探る必要がある。

オルメカ文化研究の歴史のなかでオルメカ文化の建築を研究対象としているのは非常に少ない。そのなかで, ハイザーはラ・ベント遺跡の非常に浸食された複合Cの土の巨大なマウンドはサン・ロレンソ遺跡, ラ・ベント遺跡でみられる石彫の原材が得られるロス・トゥクストラの聖なる山を象ったものであると考えた。ディールはラ・ベント遺跡とサン・ロレンソ遺跡を比較分析し相違点は社会・経済・政治の違いによるとしている (Diehl 1981)。オルメカ文化研究のなかで建築遺構研究が少ないのは, オルメカ文化の巨大石彫ばかりが目され建築遺構の研究が遅れたこと, これまで調査された遺跡では土製建造物の保存状態があまり良くないことと, 建築を意識した調査が少ないことによる。

現在, オルメカ文化研究はオルメカ文化の個々の要素のみの研究——例えば, 石彫の研究, ジャガー信仰の研究, 土偶の研究——に陥っているように思われる。また, 従来より認定されているオルメカ文化のみをオルメカ文化と規定しているため, 結局, その枠組みから抜け出す

ことができず、かえって混乱を招いている場合がある。そこで、今まで積み上げられたオルメカ文化の個別研究を見直し、オルメカ文化に先行する文化と後に続く文化との比較を通してオルメカ文化の諸特徴を導き出しオルメカ文化の定義づけをし、オルメカ文化の全体像に迫る研究が必要である。

メソアメリカの時期区分について——カミナルフユ遺跡発掘調査を中心に——

1991年3月より1994年2月まで、たばこと塩の博物館が主体となって行った中米グアテマラのカミナルフユ遺跡発掘調査から、時期区分について考える（大井 1994）。今回、カミナルフユ遺跡で発掘調査が行われたのはモンゴイ地区、チャイ神殿跡、カミナルフユ遺跡公園、テクン・ウマン像前でみつかった貯蔵穴の4地点である。

カミナルフユ遺跡には先古典期中期（1000～500 B. C.）から後古典期（A. D. 1000～1524）までの遺物が見られる。今回の調査で明らかになったカミナルフユ遺跡の時期区分はカミナルフユI期（1000～500 B. C.）、カミナルフユII期（500～200 B. C.）、カミナルフユIII期（200 B. C.～A. D. 300）、カミナルフユIV期（A. D. 300～550）、カミナルフユV期（A. D. 550～1000）、カミナルフユVI期（A. D. 1000～1524）である。そのうち、カミナルフユI期は、その存在が確認出来るだけであり、どのような文化内容を持っていたのか、いつ頃カミナルフユ遺跡の活動が始まったのかは未確認である。カミナルフユII期の遺構遺物は、破壊された後ほかの建造物に覆われていたため、その具体的な姿については不明な点が多い。カミナルフユIII期の遺構遺物は多く出土した。今回の調査においてはカミナルフユIV、VI期の遺構遺物は少なかった。一方、カミナルフユV期の遺構遺物はチャイ神殿跡で検出された。全般的にカミナルフユ遺跡では各時期の建造物の残存状態は悪かった。以下、今回の調査で原位置から出土した土器群、各遺構について論じていく。

[1] カミナルフユ遺跡の建築遺構

カミナルフユI期の建築遺構については殆どわからなかった。カミナルフユII期建築の詳細な点については解明できなかったが、モンゴイ地区では方形土製基壇上に隅丸方形と推定できる部屋構造をもつ土製建造物（以下、「焼けた建造物」とする）がたてられていたことは確認できた。「焼けた建造物」が機能していた時期に床面を掘込んで人骨の一部と土器が供物として納められていた。この「焼けた建造物」は火災によって最後を迎えた。焼けて壊れた「焼けた建造物」は埋められ、大きな土製ピラミッド状基壇（以下、「大基壇」とする）がつくられた。「焼けた建造物」を埋める途中に生贄と考えられる人骨と副葬品が置かれた。

カミナルフユIII期のモンゴイ地区では「焼けた建造物」と生贄を覆って「大基壇」がつくられた。今回の調査では「大基壇」の第一段を検出した。また、この「大基壇」にとりつく階段

の痕跡が「大基壇」の第一段に残っていた。このⅢ期の建造物に属する床面は3面あり、順次古い床を埋め暈上げして新しい床を造っていた。床面を暈上げする際には、「大基壇」の埋められる壁面部分を抉り取り「大基壇」の修復材として利用していたと考えられる。床面を暈上げする際には前時期の床上に土器などの供物を置いていた。これらの供物は新しい建築行為に対する儀礼と理解できる。そして、モンゴイ地区では、カミナルフユⅡ期の「焼けた建造物」を覆ってカミナルフユⅢ期の「大基壇」が造られた後、二度床が暈上げされて新しく造られた。しかし、「大基壇」を造ったときのような改築増築等の大規模な建築行為は行われず「大基壇」を修復することのみに重点が置かれたと考えられる。モンゴイ地区では、暈上げされ最後の床がつくられて「大基壇」が修復されたあと、顕著な建設活動は行われず、カミナルフユⅣ期になると「大基壇」は放棄された。また、カミナルフユⅢ期のチャイ神殿跡ではモンゴイ地区と同じ建築構造の建造物が存在していた。そして、カミナルフユⅢ期に相当する建造物の焼けた床面に石碑の破片がのっていた。このことはカミナルフユⅢ期の建造物に火がつけられ石碑が破壊された事を物語る。

今回の調査で発掘したカミナルフユⅣ期の建造物は、カミナルフユ遺跡公園内試掘トレンチ2で出土したモルタルの壁、床だけである。カミナルフユ遺跡公園内のアクロポリス地区とパラナ地区では同じモルタル仕上げの建造物が見られる。また、マウンドA、Bでは同じモルタル仕上げの建造物がみつかった。

カミナルフユⅤ期の建造物はチャイ神殿跡に存在する。大きな土製彫像を持つ正面の傾斜壁、拳大の黒曜石が多数嵌め込まれた枠付垂直壁等の特徴をもつ土製建造物である。この土製建造物はカミナルフユⅢ期の建築構造とは異なる。カミナルフユ遺跡公園内試掘トレンチ2ではカミナルフユⅣ期モルタルの床面より上層から焼けた土の床面が検出された。この焼けた床面はモルタルの建造物を破壊した後に造られていた。また、このモルタルの建造物の上には、チャイ神殿跡のカミナルフユⅤ期建造物が造られた土と同様に、多量の土器片混じりの土がのっていることを考え合わせると、カミナルフユⅤ期の建造物の存在が推定される。因みに、カミナルフユⅢ期の「大基壇」では、建築材の土に土器が混じることは少なく、建築構造も異なる。一方、モンゴイ地区でもカミナルフユⅢ期の床より上層で、カミナルフユ遺跡公園内と同様の焼けた土の床面がみついている。カミナルフユ遺跡公園内試掘トレンチ2とモンゴイ地区で検出された床面はすべて焼けていた。これらの焼けた土の床は火災等によって焼けたと考えられた。

[2] カミナルフユ遺跡の遺物

今回の調査ではカミナルフユⅠ期の遺物は確認できなかった。カミナルフユⅡ期の遺物はモンゴイ地区「焼けた建造物」に属する床面の堀込みから出土した土器、「焼けた建造物」を埋める際に生贄（埋葬2、埋葬3）と共に置かれた土器等がある。それらのなかで、鏝付き土器、

鎖状突帯付土器、彩文が施された凹線文土器、金属質の光沢を持つ黒彩文土器がこの時期の特徴を示す土器である。また、埋葬3からは人物形象きのこ石の破片が出土している。カミナルフユIII期の遺物としては、床を暈上げる毎に古い床面に置かれた土器等が挙げられる。褐色磨研細刻線文土器、オレンジ色ウスルタン・ネガティヴ文土器がこの時期を代表する。カミナルフユIV期の土器は今回の発掘調査で出土した量は非常に僅かであり原位置で出土したものは無かった。しかし、カミナルフユ遺跡のマウンドA、Bでは、カミナルフユIV期の特徴を持つ建造物の墓から特徴のある三脚円筒形土器他が多量に出土した。カミナルフユV期の土器としては、チャイ神殿跡から出土した素地三脚付土器と多彩色文土器がある。カミナルフユVI期の遺物はほとんど出土しなかった。また、石彫については、きのこ石の破片他が今回の調査では若干出土したのみである。

[3] カミナルフユ遺跡の時期区分

ここで、カミナルフユ遺跡の時期区分について考える。建築に関しては、カミナルフユI期の建造物は具体的には何も分かっていない。カミナルフユII期の建造物は部屋構造の土製建造物「焼けた建造物」があったことが分かっている。カミナルフユIII期では相変わらず土の建造物だが、背の低い部屋構造の建造物から背の高いピラミッド状基壇「大基壇」になる。一方、カミナルフユIV期は土製ではなくモルタル仕上げの建造物となる。カミナルフユ遺跡公園ではモルタル製建造物を覆う土製建造物がカミナルフユV期と認められる。カミナルフユ遺跡の他地区ではチャイ神殿跡で代表される土製建造物がある。カミナルフユIV期からカミナルフユV期はモルタル仕上げの建造物から再び土製建造物に変化する。また、土器は建築様式に呼応するようにカミナルフユII期からIII期は明確に変化する。カミナルフユIV期には前時期までに見られなかった特徴を持つ三脚円筒形土器が出現する。そして、カミナルフユV期、VI期にはそれぞれ特徴のある土器がみられる。

ところで、メソアメリカ全体の編年を考えた場合、カミナルフユI期は先古典期中期、カミナルフユII期とIII期は先古典期後期、カミナルフユIV期は古典期前期、カミナルフユV期は古典期後期、カミナルフユVI期は後古典期となる。以上の編年に従うと、モンゴイ地区でカミナルフユIII期に相当する層より上の攪乱層から出土した三脚円筒形土器の脚部とカンデレロ(ロウソク台形土器)は古典期前期テオティワカン文化つまりカミナルフユIV期に、チャイ神殿跡から出土した多彩色文土器は古典期後期のカミナルフユV期に、攪乱層(表土)から出土したチナウトラ式土器は後古典期のカミナルフユVI期に相当する。

このようにカミナルフユ遺跡発掘調査では建築、土器、石彫、土偶等総ての出土遺物を総合的に検討して時期区分され、すべての遺構遺物が明瞭に変化したことが観察できた。また、メソアメリカ地域における文化の変遷は土器のみとか建築のみとかが単独に変化するのではなく、文化全体が変化する。従って、オルメカ文化をほかの文化と画するためにはオルメカ文化より

先行する文化と後に続く文化とを比較し、共通点と相違点を検討しオルメカ文化の骨格を明瞭にすることが必要になる。

カミナルフユ遺跡においてはカミナルフユII期では土器などを観察するとオルメカ文化の影響が残っているが、カミナルフユIII期になるとオルメカ文化とは異なる文化が栄える。以上のことを考慮すると、カミナルフユII期にオルメカ文化の影響が薄れ始め、カミナルフユIII期は地方文化が勃興し興隆する時期といえるかもしれない。この点についてはメソアメリカ全域で同じ時期の遺跡を詳細に見ていく必要がある。

オルメカ文化の遺跡

オルメカ文化は先古典期（1000 B. C.～A. D. 300）に属している。そして、オルメカ文化はジャガーのような顔、赤ん坊のような顔、咆哮するジャガーの口、ひしゃげた鼻等を代表とする美術様式を基準としている。一方、スターリングらが行った発掘により巨大な石彫がオルメカ文化に属することが、ドラッカーらによるラ・ベント遺跡考古学調査によりオルメカ文化の人々は大規模な土木工事を行っていたことが明らかになった。本論では、現在までにオルメカ文化に属すると認められている基準をもとにしてオルメカ文化の遺跡をみつめた。

オルメカ文化の遺物が出土している遺跡からその領域をみる。北の境界は、メキシコのゲレロ州（テオパンテクアニトラン遺跡、チルパンシゴ遺跡、サン・ミゲル・アムコ遺跡）からプエブラ州（チャルカツィンゴ遺跡）、同メキシコ市（トラティルコ遺跡）を通りベラクルス州北部（ビエホン遺跡）に至る線で区切られる。南の境界はタバスコ州ウスマシタ川流域（バラカン遺跡）からチアパス州（ショク遺跡）を通りエル・サルバドル（チャルチュアパ遺跡）に至る線で区切られる。オルメカ文化の遺跡群はメキシコ中央高原地域、メキシコ湾岸地域、メキシコのチアパス州からグアテマラにかけての太平洋岸地域の3地域に分けられる。メキシコ中央高原地域ではバルサス川流域に遺跡が集中し、メキシコ湾岸地域ではコアツァコアルコス川とサン・ファン川に囲まれた地域に集中している。また、チアパス州からグアテマラの太平洋岸では海岸線に沿って遺跡の分布が集中している。

エル・サルバドル以南については、コスタ・リカまでオルメカ文化の特徴を持つひすいの小石彫は分布範囲が及んでいるが、それ以外の遺構、遺物はみられない。ひすい製小石彫は持ち運び可能でしかもひすいは他地域でも貴重視されていたこともあり、オルメカ文化と遊離して広がった可能性もある。このため、ここではコスタ・リカを南の境界と考えず、オルメカ文化の特徴を持つ大きな石彫が出土しているエル・サルバドルをオルメカ文化の南端とする。また、メキシコ湾岸のベラクルス州北部ワステカ地域でも、オルメカ文化の遺跡と同時期に大きな土製の基壇が存在している。しかし、これらの遺跡では積極的にオルメカ文化であることを証明する遺構遺物はない。従って、メキシコ湾岸地域ではオルメカ文化の特徴を持つ石彫が出土し

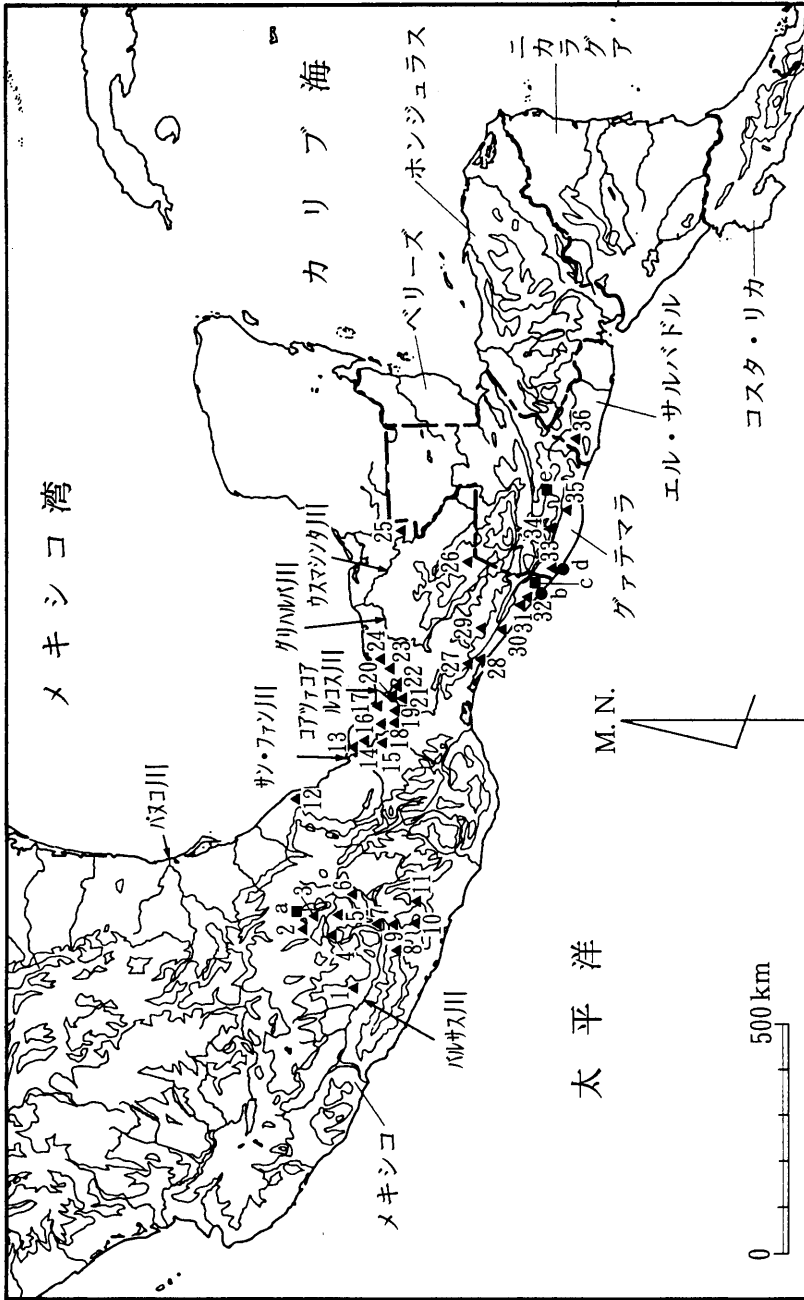


図3 オルメカ文化の遺跡分布図

- オルメカ文化の遺跡
1. サン・ミゲル・アムコ
 2. トラティルコ
 3. トラパコヤ
 4. グアルピタ
 5. チャルカツィンゴ
 6. ラス・ボカス
 7. テオバンテクアニトラン
 8. チャルパンシンゴ
 9. オストティトラン
 10. フストラウカ
 11. カカウシキ
 12. ビエホン
 13. コバタ
 14. トレス・サボテス
 15. クアウトトラパン
 16. ラグナ・デ・ロス・セロス
 17. サン・マルティン・パハパン
 18. クルス・デ・ミラグロ
 19. エステロ・ラホン
 20. アントニオ・ブラサ
 21. サン・ロレンソ
 22. アロヨ・ソソ
 23. ロス・ソルダドス
 24. ラ・ベスタ
 25. バランカン
 26. ショク
 27. テイルテペク
 28. ツツクリ
 29. パドレ・ビエトラ
 30. ビヒリアパン
 31. ブエナ・ビスタ
 32. オホ・デアグア
 33. ラ・ブランカ
 34. アバフ・タカリク
 35. モンテ・アルト
- その他の文化の遺跡
- a. テオティワカン
 - b. パン・デ・ラ・アマダ
 - c. イサバ
 - d. ラ・ビクトリア
 - e. カミナルフユ

ているピエホン遺跡を北限と考える（図3）。

オルメカ文化の定義について

現在、オルメカ文化にたいする基準はジャガーのような顔、赤ん坊のような顔、咆哮するジャガーの口、ひしゃげた鼻等を代表とする美術様式である。また、メソアメリカの時期区分については、カミナルフユ遺跡発掘調査から、文化が変われば建築、土器をはじめとする遺物も変化したことは明らかである。

以上のことを考慮するならば、現在認定されているオルメカ文化の諸要素とオルメカ文化の時期に先行する文化および後に続く文化の諸要素を比較することでオルメカ文化の特徴を明瞭にできる。以下、石彫、土器・土偶、そして建築の順にオルメカ文化とそれ以外の諸文化との相違点を明らかにしつつ、オルメカ文化の特徴を論じていく。また、ケレロ州ではオルメカ文化の特徴を持つ壁画が描かれている洞窟が数例発見されているがここでは扱わない。本論でオルメカ文化と比較する文化はオルメカ文化に先行するバラーオコス文化、オルメカ文化に続くイサパーカミナルフユ文化とテオティワカン文化である。

[1] 石彫（図4）

オルメカ文化に先行する文化としてはとしてバラーオコス文化（1800～1500B. C.）が知られている。この文化にはまだ石彫はみられない。オルメカ文化の後に続くイサパーカミナルフユ文化では石碑と祭壇を中心とした文化が栄えている。また、このイサパーカミナルフユ文化の後に建築に石彫が組み合わさるテオティワカン文化が栄える。以下、石彫からオルメカ文化の特徴をみる。

イサパーカミナルフユ文化はイサパ遺跡、カミナルフユ遺跡を中心にその石彫の特徴を見ていく。イサパ遺跡から出土した石彫の特徴として挙げられるのは①非常に文様の組み合わせが複雑（オルメカ文化でもラ・ベント遺跡石碑2、石碑3のように中心となる人物像を取り巻くように小さな人物群が浮き彫りされているが、イサパ遺跡の石彫のように主要な文様に次々に他の文様要素が絡み付いていくような表現はない）、②聖なる木と考えられたセイバと思われる木の表現、③巨大な石彫が少ないこと、④浮き彫りが多く、丸彫りが少ないこと、⑤装身具の複雑さ、⑥石碑の上下を帯状の文様帯で区画すること等である。カミナルフユ遺跡では①文様の組み合わせが複雑、②渦巻文の多用、③石彫を区画する文様帯、④浮き彫りが多く、丸彫りが少ないこと等が挙げられる（Parsons 1986）。また、テオティワカン遺跡では建築物に関係なく単独で石彫が作られることは非常に少なく建築物の装飾に使われる場合（例えば、ケツアルコアトル神殿にあるトラロック神の石彫）が多い。また、単独に石彫がつけられても非常に角張った表現である（Gamio 1922; Matos 1990; Gendrop 1970）。

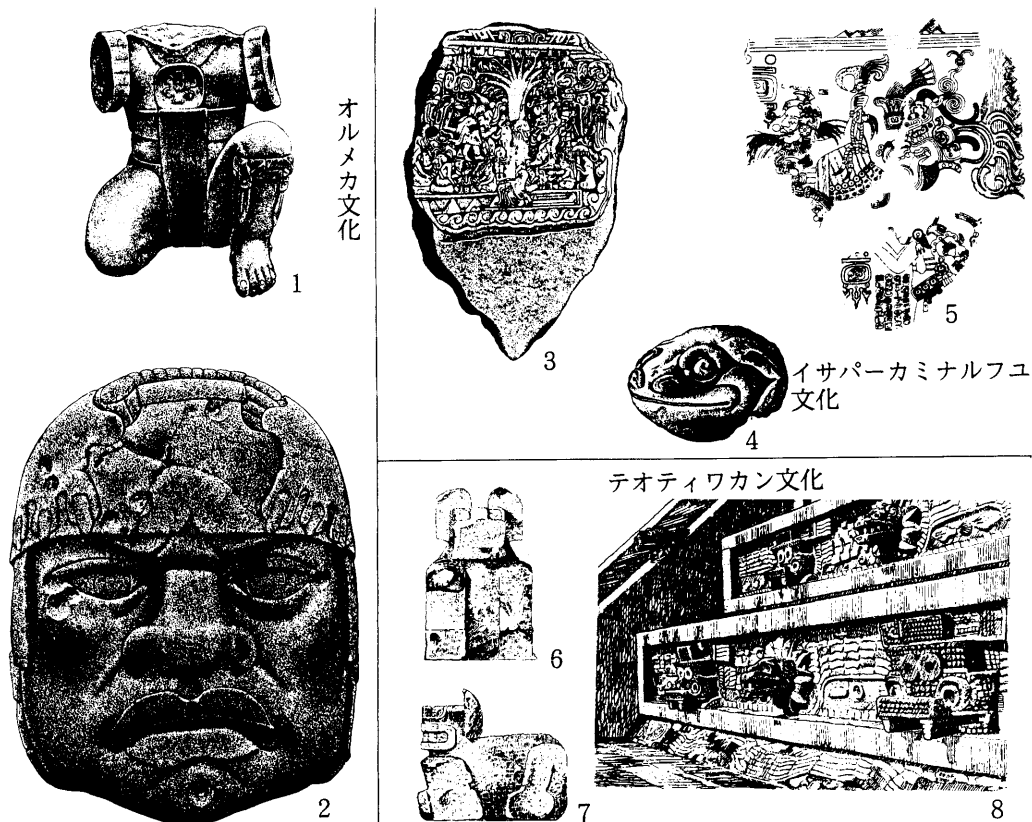


図4 各時期の石彫

(1, 2 は Coe and Diehl 1980 fig. 466, 428 を転載; 3, 4 は Lowe, Lee and Martínez 1982 fig. 8. 1. から転載; 5 は Parsons 1986 fig. 175 を転載; 6, 7 は Gamio 1922 Lamina 25 より転載; 8 は Gendrop 1970 fig. 54 を転載)

オルメカ文化の石彫は、巨大な石彫が多いこと、浮き彫りと丸彫りの量を比較した場合丸彫りの量が多いこと、非常に写実的な石彫が多いこと、単純な装身具しか表現されていないことを特徴とする。そして、イサパーカミナルフユ文化、テオティワカン文化の石彫とを比較すると、オルメカ文化の石彫は、1) 石彫を区画する上端と下端の文様帯をもたない、2) 複雑な装身具を持たない、3) 複雑な渦巻文を持たない、4) 建造物と組み合わせる例はまれ、5) 角張った表現はない、という相違点が見いだせる。

また、アバフ・タカリク遺跡ではオルメカ文化の特徴を持つ石彫とイサパーカミナルフユ様式を持つ石彫とが出土している。また、より古い年代を考えると 200 B. C. 以前の石碑があり、メソアメリカにおける暦の起源を探るうえで重要である。

〔2〕土器・土偶 (図5)

オルメカ文化に先行するバラーオコス文化 (1800 B. C.~1500 B. C.) の土器のなかで、文様として目立つのは刺突文、ロッカー・スタンピング文、区画文、赤彩文、器形として目立つのはテコマテ (無頸壺)、鉢である。この時期の土偶は出土例が少ないが腫れぼったい顔、厚い唇、刺突による目の表現が特徴である。一方、オルメカ文化の後に続くイサパーカミナルフユ文化には褐色細刻線文土器、オレンジ色ウスラン・ネガティブ文土器がある。また、この時期の土偶は不明な点が多い。テオティワカン文化の土器はテオティワカン式三脚円筒形土器、カンデレロ、オレンジ色薄手土器等が挙げられる。テオティワカン文化の土偶はのっぺりとした顔、溝を切ったような切れ長の目という特徴がある (Séjourné 1959, 1966)。

オルメカ文化は白色、黒色で刻線が施されている土器、彫刻をしているような文様を持つ土器を特徴とする。また、人物形象、動物形象といった立体的な土器も多い。オルメカ文化の土

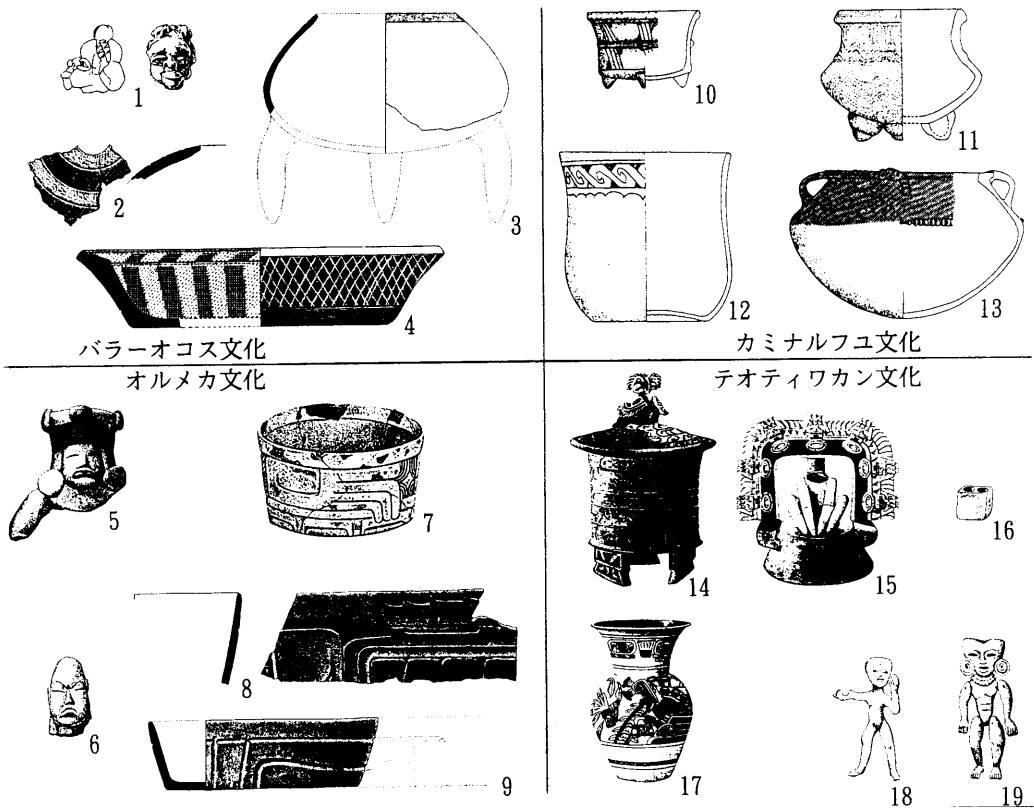


図5 各時期の土器・土偶

(1, 2, 3, 4は Coe 1961 fig. 37i, 17f, 14, 20 を転載; 5, 6, 8, 9は Coe and Diehl 1980 fig. 331, 350, 140i, 142 を転載; 7は Covarrubias 1957 より転載; 10, 11, 12, 13は大井 1994 fig.3 5—19,5—22, 5—20, 5—24 から転載; 14, 15, 16, 17は Séjourné 1966 fig. 50, 39, 17, 134 から転載; 18は Séjourné 1959 fig. 60 から転載; 19は Matos 1990 fig. 58 から転載)

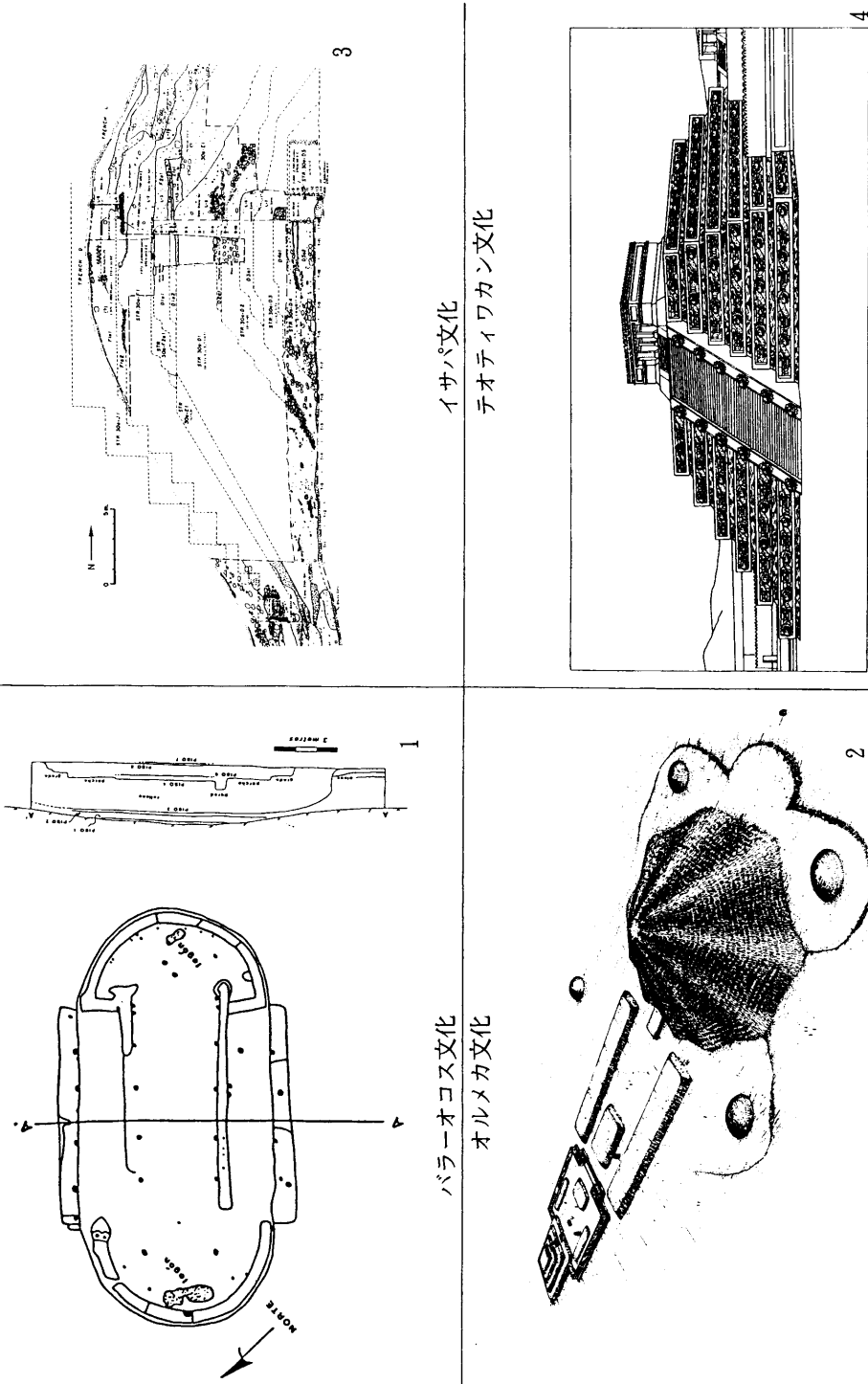


図6 各時代の建造物

(1は Blake and Feddema 1991 fig. 5 を改変； 2は Gendrop 1970 fig. 40 を転載； 3は Lowe, Lee and Martínez 1982 fig. 7. 27. を転載； 4は Matos 1990 fig. 31 を転載)

偶は赤ん坊のような豊かな頬，ふくよかな体，白い化粧土という特徴をもつ。

〔3〕 建築様式・建築構造（図6）

オルメカ文化に先行するバラエオコス文化の建築についてはパソ・デ・ラ・アマダ遺跡の隅丸方形の土製建造物しかみられない。イサパーカミナルフユ文化に属する建築ではイサバ遺跡（Lowe, Lee and Martínez 1982; Norman 1976）、チャルチュアバ遺跡（Sharer 1978）においては河原石で整えられた建造物がある。カミナルフユ遺跡では背の高い土製ピラミッド状基壇を特徴とする。また、メキシコ中央高原ではイサパーカミナルフユ文化に相当する時期にクイクイルコ遺跡の溶岩でできた建造物が存在する（Shávelzon 1983）。テオティワカン文化ではメキシコ中央高原の一大勢力であったテオティワカン勢力の拡大時期に当たりテオティワカン様式のタルー・タブレロ式（傾斜壁と枠付装飾壁）の建築が広範囲に見られる。

最後に、オルメカ文化の建築について述べる。土製建造物は、テオパンテクアニトラン遺跡、バリオ・デル・ロサリオ・ウィツォ遺跡（Flannery 1976; Drennan 1976）、サン・ホセ・モゴテ遺跡（ibid.）、アバフ・タカリク遺跡（Orrego 1990）、そしてサン・ロレンソ遺跡（Coe and Diehl 1980）、ラ・ベンタ遺跡で見つかっている。これらの土製建造物のなかには、規模が大きく高いものと比較的小さく背の低いものがある。また、ラ・ベンタ遺跡、テオパンテクアニトラン遺跡、チルパンシゴ遺跡、チャルカツインゴ遺跡、サン・ホセ・モゴテ遺跡、バリオ・デル・ロサリオ・ウィツォ遺跡、ツツクリ遺跡では、石の建造物がみられる。そのなかで、ラ・ベンタ遺跡、テオパンテクアニトラン遺跡では切石で作られた建造物がある。一方、ラ・ベンタ遺跡、サン・ロレンソ遺跡を除くとオルメカ文化の時期では巨大な建築複合は見られない。また、チルパンシゴ遺跡ではマヤ式疑似アーチが見つかっている。

オルメカ文化の建築には、さまざまな土製建造物や石の建造物があり、他の文化と比べて特徴を際立たせることは難しい。しかし、オルメカ文化ではほかの文化に比べて土の建造物が広範囲に広がっていることは事実である。また、土の背の低い建造物はオルメカ文化のみではなくバラエオコス文化でも、河原石を積み上げる建造物と巨大な土製建造物はイサパーカミナルフユ文化でもみられる。アバフ・タカリク遺跡では、オルメカ文化に相当する時期に土の建造物があり、イサパーカミナルフユ文化と同時期には河原石を積み上げた建造物があると報告されている。このことから類推すると、建築については、土の建造物はオルメカ文化、河原石の建造物はイサパーカミナルフユ文化と、建築の編年が組める可能性がある。しかし、この一例のみでは判断しようがないため、今後の資料の増加を期待する。

まとめ

現在ある資料から、オルメカ文化は時期的には先古典期中期（1000 B. C.～500 B. C.）に属

し、地域はゲレロ州からベラクルス州までを北限としウスマシタ川流域からエル・サルバドルまでが南限となる。しかし、一部地域ではかなり遅くまでオルメカ文化の残影がのこり(テオティワカン文化の拡大期までか)、メキシコ湾岸地域ではパヌコ川までオルメカ文化の範囲が広がる可能性がある。

ここまでの分析からオルメカ文化の特徴についてまとめる。

オルメカ文化の石彫の特徴は、他の時期に比べ巨大な石彫が多いこと、浮き彫りと丸彫りの量を比較した場合、丸彫りの量が断然多いこと、非常に写実的な石彫が多いこと、単純な装身具しか表現されていないことである。また、他の文化の石彫と比較すると、オルメカの石彫は 1) 石彫の主題を仕切る上下の文様帯をもたない、2) 複雑な装身具を持たない、3) 複雑に組み合った渦巻文を持たない、4) 建造物と組み合わせる例はまれ、5) 角張った表現はない、という特徴を持つ。

オルメカ文化に特有の土器としては刻文がつけられた白色若しくは黒色土器、刻文ではなく彫刻もしくは浅浮彫のような表現がされる土器がある。また、人物形象、動物形象といった立体的な土器も多く見られる。

オルメカ文化が栄えた時期には低い部屋構造の土製建造物、河原石を積み上げた建造物、大きな土製建造物がある。また、前時期と比べ規模が大きく計画性のある建築複合体を持つ。ところで、1) バラーオコス文化の低い土製建造物がオルメカ文化に先行するののか、オルメカ文化に属するののか、2) 河原石を積み上げる建造物がオルメカ文化の特徴なのか次に続くイサパーカミナルフユ文化の特徴なのか、という解決すべき問題がある。今後バラーオコス文化、オルメカ文化、イサパーカミナルフユ文化の建築遺構発掘例の増加により時期区分が出来るであろう。また、カミナルフユ遺跡では、巨大な土製建造物はイサパーカミナルフユ文化にとみられる。このことを考慮すると建築遺構の地域差も検討しなければならない。しかし、オルメカ文化には、後に続く時期に比べ、土製建造物が多いことは明らかである。

以上、オルメカ文化の特徴を述べた。しかし、まだまだ解決すべき問題点は多く残っている。

ところで、オルメカ文化の定義づけで重要なのは、カミナルフユ遺跡の時期区分で見たように、どの組み合わせがオルメカ文化のものなのかということである。また、メソアメリカ全域で見た場合オルメカ文化の地方差といったものがあるかということも考えなければならない。例えば、テオティワカン建築を代表するタルータブレロ式という建築様式がある。ティカル遺跡ではテオティワカン遺跡と同様に石で造られているが、カミナルフユ遺跡ではモルタルで仕上げが成されている。様式だけを見るならば、テオティワカンとなら変わりはないが、建築材のみは異なっている。この場合、現地の建築技法、建築材の供給源を考慮するならば致し方ない場合があったものとする。また、建築材の供給源の都合によって地方差が出てくる場合、地方ごとの技術差により地方差が生じる場合があると思われる。一方、建築と同様にテオティワカン式三脚円筒形土器は若干の雰囲気の違いはあるがいろいろな地域に広がっている。この

ように、テオティワカン文化はメソアメリカ全域で建築、土器等が一体となって広がっており、テオティワカン勢力がメソアメリカ各地域を席卷していった様子が伺える。それに対してオルメカ文化では、美術様式は共通した要素を持つが建築を見ると非常に変化に富んでいる。オルメカ文化の広がりにはテオティワカン文化の広がりかとは異なる。こうしたオルメカ文化の広がりにはどのような背景—例えば、1) オルメカ文化の時期には、強大な統一勢力はなく各遺跡が相互に緩やかな同盟を結んでいた、2) 象徴的な権力を持った、王権を認めるような場所がありそこを中心にまとまっていた—があったのかということも考慮に入れつつ分析していく必要があると考える。

オルメカ文化では石彫、土器、土偶、装身具等を見ていくと同じ文様が随所にみられる。従って、現時点では石彫等でみられる美術様式を中心に、オルメカ文化を規定していくほうが意味のあると考える。また、以上の分析から引き出した諸特徴でオルメカ文化を定義し、その規定されたオルメカ文化の特徴をもつ遺跡を比較し、その建築、土器、石彫等の特徴をさらに厳密に検討し総合するならば、オルメカ文化のより信頼のおける概念規定ができると考える。

<謝辞>

この論文を書くにあたり有益な御教示を頂いた京都外国語大学大井邦明教授、カミナルフユ遺跡調査で御世話になったたばこと塩の博物館の方々、そのほかグアテマラで御助力いただいた方々に深く感謝したい。

参考文献

Benson, Elizabeth P. (ed.)

1981 *The Olmec & Their Neighbors: Essay in Memory of Matthew W. Stirling*. Washington D.C.

Bernal, Ignacio.

1968a “View of Olmec Culture.” In *Dumbarton Oaks Conference on the Olmec, Oct. 28th and 29th, 1967*, edited by Elizabeth P. Benson, pp. 135~142. Washington D.C.

1968b *El mundo Olmeca*. Mexico D.F.

1969 *The Olmec World*. Berkeley.

Blake, Michael and Vicki Feddema.

1991 “Paso de la Amada: un resumen de las excavaciones, 1990.” In *Primer Foro de Arqueología de Chiapas: Cazadores-Recolectores-Pescadores, Agricultores, serie memorias 4*, pp. 75~85, Tuxtla Gutiérrez.

Caso, Alfonso

1942 “Definición y extensión del complejo Olmeca.” In *Mayas y Olmecas, Segunda Mesa Redonda*, pp.46~49, Sociedad Mexicana de Antropología, Tuxtla Gutiérrez.

Clellow, C. William, Jr.

1974 ***Stylistic and Chronological Study of Olmec Monumental Sculpture***. *Contributions of the University of California Archaeological Research Facility 19*, Berkeley.

Clellow, C. William, Jr., Richard A. Cowan, James F. O'Connell, and Charles Benemann.

1967 ***Colossal Heads of the Olmec Culture***. *Contributions of the University of California Archaeological Research Facility 4*, Berkeley.

Coe, Michael D.

1961 ***La Victoria: an Early Site on the Pacific Coast of Guatemala***. *Papers of the Peabody Museum of Archaeology and Ethnology, Harvard University Vol.53*. Cambridge.

1965a ***The Jaguar's Children: Preclassic Central Mexico***. New York.

1965b "Archaeological Synthesis of Southern Veracruz and Tabasco." In ***Handbook of Middle American Indians 3***, edited by Robert Wauchoppe, pp.679~715. Austin.

1965c "The Olmec Style and Its Distributions." In ***Handbook of Middle American Indians 3***, edited by Robert Wauchoppe, pp.739~775. Austin.

1968 "San Lorenzo and the Olmec Civilization." In ***Dumbarton Oaks Conference on the Olmec, Oct. 28th and 29th, 1967***, edited by Elizabeth P. Benson, pp.41~78. Washington D.C.

Coe, Michael D. and Richard A. Diehl.

1980 ***In the Land of the Olmec***. Austin.

Covarrubias, Miguel

1942 "Origen y desarrollo del estilo artistico Olmeca." In ***Mayas y Olmecas, Segunda Mesa Redonda***, pp.46~49. Sociedad Mexicana de Antropología, Mexico D.F.

1957 ***Indian Art of Mexico and Central America***. New York.

Diehl, Richard A.

1981 "Olmec Architecture: A Comparison of San Lorenzo and La Venta." In ***The Olmec & Their Neighbors: Essay in Memory of Matthew W. Stirling***, edited by Elizabeth P. Benson, pp. 69~81. Washington D.C.

Drennan, Robert D.

1976 "Religion and Social Evolution in Formative Mesoamerica." In ***The Early Mesoamerican Village***, edited by Kent V. Flannery, pp.346~368, Orlando.

Drucker, Philip

1952 ***La Venta Tabasco; A Study of the Ceramic Complex of La Venta***. *Smithsonian Institution, Bureau of American Ethnology, Bulletin 153*, Washington D.C.

Drucker, Philip, Robert F. Heizer, and Robert Squier

1959 ***Excavations at La Venta, Tabasco 1955***. *Smithsonian Institution, Bureau of American Ethnology, Bulletin 170*, Washington D.C.

Flannerly, Kent V

1968 "The Olmec and Valley of Oaxaca: A Model for Interregional Interaction in Formative Times." In *Dumbarton Oaks Conference on the Olmec, Oct. 28th and 29th, 1967*, edited by Elizabeth P. Benson, pp.79~117. Washington D.C.

1976 "Contextual Analysis of Ritual Paraphernalia from Formative Oaxaca." In *The Early Mesoamerican Village*, edited by Kent V. Flannery, pp.333~345, Orlando.

Furst, P. T.

1968 "The Olmec Were-Jaguar Motif in the Light of Ethnographic Reality." In *Dumbarton Oaks Conference on the Olmec, Oct. 28th and 29th, 1967*, edited by Elizabeth P. Benson, pp. 143~174. Washington D.C.

1981 "Jaguar Baby or Toad Mother: A New Look at an Old Problem in Olmec Iconography." In *The Olmec & Their Neighbors: Essay in Memory of Matthew W. Stirling*, edited by Elizabeth P. Benson, pp.149~180. Washington D.C.

Gamio, Manuel.

1922 *La población del valle de Teotihuacan, volumen 1~3*. Mexico D.F.

Gendrop, Paul.

1970 *Arte prehispánico en Mesoamerica*. Mexico D.F.

Grove, David C.

1968 "The Pre-Classic Olmec in Central Mexico: Site Distribution and Inferences." In *Dumbarton Oaks Conference on the Olmec, Oct. 28th and 29th, 1967*, edited by Elizabeth P. Benson, pp.179~185. Washington DC.

1984 *Chalcatzingo: Excavations on the Olme Frontier*. London.

Grove, David C. (ed.)

1987 *Ancient Chalcatzingo*. Austin.

Heizer, Robert F.

1968 "New Observations on La Venta." In *Dumbarton Oaks Conference on the Olmec, Oct. 28th and 29th, 1967*, edited by Elizabeth P. Benson, pp.9~40. Washington D.C.

Joralemon, P. David.

1971 *A Study of Olmec Iconography. Studies in Pre-Columbian Art and Archaeology 7*, Washington D.C.

1976 "The Olmec Dragon: A Study in Pre-Columbian Iconography." In *Origins of Religious Art and Iconography in Preclassic Mesoamerica*, edited by H. B. Nicolson, pp.27~71. Los Angeles.

Lowe, Gareth W., Thomas A. Lee, Jr. and Eduardo Martínez Espinosa.

1982 *Izapa: An Introduction to the Ruins and Monuments. Papers of the New World*

- Archaeological Foundation* 31. Provo, Utah.
- Lucket, Karl W.
1976 *Olmec Religion: A Key to Middle America and Beyond*. Norman.
- Martínez Donjuán, Guadalupe.
1986 “Teopantecuanitlán.” In *Arqueología y Etnohistoria del estado de Guerrero*, edited by Roberto Cervantes-Delgado, pp.55~80, Mexico D.F.
1990 “Una tumba troncocónica en Guerrero. Nuevo hallazgo en Chilpancingo.” *ARQUEOLOGIA 1, Revista de la Dirección de Arqueología del INAH*, pp.59~66, Mexico D.F.
- Matos Moctezuma, Eduardo.
1990 *Teotihuacán: the City of Gods*. New York.
- McDonald, Andrew J.
1983 *Tzutzuculi: A Middle-Preclassic Site on the Pacific Coast of Chiapas, Mexico. Papers of New World Archaeological Foundation* 47. Provo, Utah.
- Milbrath, Susan.
1979 *A Study of Olmec Sculptural Chronology. Studies in Pre-Columbian Art and Archaeology* 23. Washington D.C.
- Muse, Mike and Terry Stocker.
1974 “The Cult of the Cross: Interpretations in Olmec Iconography.” *Journal of the Steward Anthropological Society* 5, pp.67~98.
- Norman, V. Garth.
1976 *Izapa Sculpture, Part 2: Text. Papers of the New World Archaeological Foundation* 30. Provo, Utah.
- Ohi, Kuniaki. (ed.)
1994 *Kaminaljuyú 1991~'94*. Tokyo.
大井邦明 監修
1994 カミナルフユ 1991~'94. 東京
この論文で分析したカミナルフユ遺跡の解釈は大井邦明から御教示頂いたものである。
- Orrego Corzo, Miguel.
1990 *Investigaciones arqueológicas en Abaj Takalik, El Asintal, Retalhuleu, año 1988: Reporte No.1*. Guatemala, C.A.
- Parsons, Lee Allen.
1986 *The Origins of Maya Art: Monumental Stone Sculpture of Kaminaljuyu, Guatemala, and the Southern Pacific Coast. Studies in Pre-Columbian Art and Archaeology* 28.

Washington D.C.

Piña Chan, Roman.

1982 *Los Olmecas Antiguos*. Mexico D.F.

Proskouriakoff, Tatiana.

1968 "Olmec and Maya Art: Problems of Their Stylistic Relation." In *Dumbarton Oaks Conference on the Olmec, Oct. 28th and 29th, 1967*, edited by Elizabeth P. Benson, pp. 119~134. Washington D.C.

Reyna Robles, Rosa Ma. and Guadalupe Martínez Donjuán.

1989 "Hallazgos funerarios de la época olmeca en Chilpancingo.", *ARQUEOLOGIA 1, Revista de la Dirección de Arqueología del INAH*, pp.13~22, Mexico D.F.

Schávelzon, Daniel.

1983 *La Piramide de Cuicuilco*. Mexico D.F.

Séjourné, Laurette.

1959 *Un palacio en la ciudad de los dioses [Teotihuacán]*. Mexico D.F.

1966 *Arqueología de Teotihuacan: la cerámica*. Mexico D.F.

Sharer, Robert J. (ed.)

1978 *The Prehistory of Chalchuapa, El Salvador, Volumen 1~3*. Philadelphia, Pennsylvania.

Soustelle, Jacques.

1985 *The Olmecs: The Oldest Civilization*. Norman.

Stirling, Matthew W.

1943 *Stone Monuments of Southern Mexico*. *Smithsonian Institution, Bureau of American Ethnology, Bulletin 138*. Washington D.C.

1955 "Stone Monuments of the Rio Chiquito, Veracruz, Mexico." *Smithsonian Institution, Bureau of American Ethnology, Bulletin 157*, pp.1~23. Washington D.C.

1965 "Monumental Sculpture of Southern Veracruz and Tabasco." In *Handbook of Middle American Indians 3*, edited by Robert Wauchope, pp.716~738. Austin.

Stocker, Terry., Sarah Meltzoff and Steve Armsey.

1980 "Crocodilians and Olmecs; Further Interpretations in Formative Period Iconography." *American Antiquity 45*, pp. 740~758.

Vaillant, G. C.

1932 "A Pre-Columbian jade." *Natural History 32*, pp.512~520

Villela F, Samuel L.

1989 “Nuevo testimonio rupestre olmeca en el oriente de Guerrero.”, *ARQUEOLOGIA 1, Revista de la Dirección de Arqueología de INAH*, pp.37~48, Mexico D.F.